

# 粘るこぶし 花開く



デビュー曲のレコーディングに臨む小倉憲一さん。13年間の下積みを振り返り、「苦労しなくても一生を終える人もいる時代に、そこでしかできない経験をさせてもらった」(提供写真)

松山出身 小倉さん

## 下積み13年 演歌歌手へ

レコーディングでは13年分の思いを込めて歌い上げた。「あ故郷(ふるさと) 故郷がいちばん」。作曲家船村徹氏(79)の住み込みの内弟子、付き人として、下積みを重ねてきた松山市出身の小倉憲一さん(32)が7月、念願の演歌歌手デビューをする。芸名は「えひめ憲一」。名前の通り「郷土愛や絆を大切にしたい」と飛躍を誓う。

## 芸名・えひめ憲一 「郷土愛・絆 大切に」

小倉さんは愛媛大農学部2年の1999年11月、船村氏に入門。栃木県日光市の船村氏のアトリエで、身の回りの世話をしながら、厳しい指導を受けてきた。

デビューのタイミングは、成長や時流を見ながら船村氏が決める。これまで船村氏の下を巣立った約200人の中で、もっとも長くかかったと言われるが、「聴く人の気持ちや理解できる歌い手になるため必要な時間だった。すべてが勉強であり、経験になった」と感謝する。

2011年にもデビューの話が出ていたが、東日本大震災で延期された。東北から離れた栃木のアトリエも全壊状態。「日本中、音楽どころではない状況だった。でも、前向きに生きる気持ちや粘りは演歌の神髄。歌で精神的に日本を励ましたいと思うよ

うになった」と足元を見つめ直す機会にもなったという。

船村氏は、まな弟子の門出を「照る日も曇る日もそれなりに生きる。それを積み上げることで、歌に奥行きや味が出てくる。そういう時期になったのではないか」と独特の表現で祝福。「派手ではなくとも息長く、社会貢献できる歌手になってほしい」とエールを送った。

デビュー曲は7月18日発売。船村氏の作曲による「故郷がいちばん」は、郷愁や家族への思いを、素直な詞と耳になじむメロディーで表現。カップリング曲は、松山の名所・名産を軽快な音頭で歌い上げた「おいでんか松山へ」。

今後は、愛媛と栃木を中心に活動する。小倉さんは「演歌歌手は地元で愛されてこそ。地元看板を背負っているつもりで頑張りたい」と、しっかり前を見据えていた。

(坂本敦志)